# はじめに

中本真生子

西川長夫氏の研究の中でも,「国民国家論」はとりわけ大きな影響力を持ったものである。「国民という怪物」を作り出す「装置」という定義のもとに，国民国家の成り立ちを「歴史を逆向きに」辿り直すその研究は，多くの賛同とともに，批判や非難といった反応も引き出し,「国民国家論」をめぐって, 多くの議論, 論争が繰り広げられた。その端緒となった 1992 年出版の『国境の越え方』からほぼ四半世紀が経過した現在，国民国家論とは何なのか，私たちはそこから何を学び，またこの論をめぐる様々な議論から何を引き出すことができるのか，そのような思いを「国民国家論の越え方」というタイトルに込めた。国民国家論に多大な影響を受け，また批判や議論も盛んであった日本史（戦後歴史学）の立場，むしろ一歩引いた距離を保った感のある西洋史の立場, そして「歴史学」とは異なるフィールド, 国民国家の「負の側面」がアクチュアルな問題として息づく移民研究の立場から，それぞれ報告とコメントをいただいた。国民国家論受容の詳細や提示された問題点, 批判等については各論者に委ねるが, ここで「国民国家論」に対する私見を少しだけ述べておきたい。

国民国家論は，国家の中の「主流」「マジョリティ」にとっては耳の痛い，痛烈な批判であり，ある意味「人に対して厳しい」論である。しかしそれは裏を返せば，マジョリティではない人々（少数民族や移民，女性，そして植民地とされた地の人々）の声，体験を掬い挙げ，彼らの存在に手を差し伸べ，よりよき共生を求めるという「優しさ」にも満ちていると思う。西川氏は，マイノリティにとって「国民国家」がどれほどの圧力を持つ装置であるのか，またそれがどのように人々を「国民化」し,「国民化」された人々が「他者」に対してどれほど抑圧的，暴力的な行動を取りうるのかを告発し続けた。しかしながら，人が「国民」となるプロセスを丹念に辿ること，そうして形成された「国民」という「共同体」の暴力性や残酷さを指摘することは，マジョリティが「国民」であることに疑問を抱き, そこから脱出するための「導き」（コメンテーターの崔氏は「灯台」という言葉を使っている）ともなり得るであろう。かつて西川氏が,「いわゆる〈中心〉にいる自分が（国民国家論やマイノリティ研究に対して）何を発言できるのか，していいのかわからないんです」という発言に対して，間髪入れず「そのような立場にある人こそが，発言しなければならないんじゃないですか」と返答していたことが思いだされる。

最後に,「なぜそんなに国民国家に拘るんですか？」という問いに対する,「それは国民国家が戦争を起こすからです」という, 西川氏の返答を記しておきたい。同じく西川氏の「（自国の〈正義〉を疑う経験を持たない）戦争に負けたことのない国はだめですね」という言葉も合わせて挙げておこう。「戦争に負けたことのある」経験を持つ国に住む私たちは,「国民国家論」を，それをめぐる議論や批判も含めて咀嚼し，越え，この西川氏の痛切な訴えを引き継いでいかね

ばならないと思う。